

# 東海 散士（とうかい・さんし）

## 1、プロフィール

会津戦争で亡国の士となった自身の体験を原点として、6年間の米国留学で得た知識を下に書いた『佳人之奇遇』は、政治小説の傑作として世に迎えられた。

<生没>

1852(嘉永5)年12月2日 ~ 1922(大正11)年9月25日

<代表作>

『佳人之奇遇』『東洋之佳人』

<青森との関わり>

藩(旧会津藩)に一家は転住してきたが、散士は明治5、6年には、弘前の東奥義塾に籍を置いたという。

## 2、作家解説

政治家、小説家、ジャーナリスト。安房国富津の会津陣屋に生まれた。本名柴四郎。父は三百石取りの会津藩士であった。明治元年9月、官軍の会津城攻撃には銃を取って戦った。落城後は降伏者となって護送、監禁された。亡国の民となったこのときの体験がのちの文学の原点となる。その間、一家は斗南藩(下北)に転住した。弟柴五郎は青森県庁に勤めたが、のちに陸軍大将となった。明治5年頃には弘前の東奥義塾の籍を置いたようである。7年になって横浜税関長柳谷謙太郎の書生となり、ようやく学業に専念できる。

10年臨時将校となり、西南戦争に従軍した。凱旋後、岩崎家の援助を受け、12年米国に留学した。サンフランシスコの商法学校、その後ハーバート大学、ペンシルベニア大学で経済学を専攻した。

18年1月帰朝した。散士は米国留学中、西洋強国の東方侵略が着々と進み、世界が今や弱肉強食となりつつある事実を目撃、日本の危機を警告する『佳人

之奇遇』初編を同年 10 月に刊行する。主人公は作者の東海散士自身で登場するという構想で、政治小説、中でも国権小説の傑作として位置づけられているが、第八編を 30 年 10 月に刊行したものの未完に終わった。21 年には『東洋之佳人』を刊行している。

散士は、その後は国権伸長と東亜振興の理想を政治に表そうとして衆議院議員でも活躍した。27 年立憲革新党を結成、その後、進歩党、憲政党、憲政本党、大同倶楽部の幹部として活躍した。31 年に農商務次官、大正 4 年に外務参政官にそれぞれ就任した。

### 3、資料紹介

#### ○『佳人之奇遇』

図書

1885(明治 18)年～1897(明治 30)年

230mm×150mm

明治 18 年に初編が刊行され、30 年に第八編が刊行されたものの、未完に終わった。政治小説の傑作として評価されている。主人公は旧会津藩士の散士自身であるが、物語は幽蘭、紅蓮の二佳人との別離と邂逅の中に、西洋列強の犠牲となる弱小民族の悲史を語る。